

平成29年度 学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	教員海外研究支援経費
研究者氏名・所属・職名	竹内 康浩 ・ 釧路校 ・ 教授
研究題目	台湾に残る日本統治期の遺跡の現状調査と歴史認識の検討
主たる滞在地名及び属する国名	台中・台北・基隆（台湾）
滞在期間	平成29年9月22日～9月29日（8日間）
研究内容及び成果の概要	
<p>近年、台湾においては各地でかつての日本統治時代の建築物を改修して新たな商業施設などに利用する動きが高まっている（リノベーション）。その場合、日本統治時代のその建造物の由来や利用のされ方を現代においても踏襲したものであるのか否かは、大きな問題になると思われる。なぜなら、それは日本が台湾を統治したという歴史とその記憶を現代においても確かに認識し背負ってゆくという、いわゆる「歴史認識」の問題に強く結びつくからである。1980年代後半からの民主化の進展、2000年における陳水扁の総統就任までの国民党支配の時代には、日本統治時代はひたすらネガティブに扱われ、神社をはじめとする施設の破壊や石碑などの記念碑の破棄などが多く行われた。しかし、民主化に伴い、日本統治時代についても台湾史の一部として理解しようとする動きが高まり、日本統治時代の歴史を掘り起こし、ニュートラルに検証しようとする作業が進みつつある。それは学術の分野のみならず、むしろ映画や文学などのサブカルチャーにおいてむしろ広範な人々の関心を寄せてもいる。上記のリノベーションもそうした流れの中に位置づけられるものであり、本研究はこうした近年の動きに注目したものである。</p> <p>今回は、リノベーションとして成功した例がある台中、日本によってダムが建設された日月潭、日本人が多数殺された事件が起こった霧社、日本人が最初に上陸する場所として重要であった基隆、そして台湾最大都市の台北を対象として調査を行った（当初予定していた烏来は台風による破壊後の修復が進んでおらず断念。台北市内も時間の都合でリノベーション施設だけになった）。以下、若干の例を示す。台中では、宮原眼科のように菓子店として大いに繁盛しているケースがある。戦前はまさに宮原武熊医師の経営する医院であったが、建物が老朽化しさらに1999年の大地震やその後の台風で損壊したものを、当地の菓子業者「日出」が買い取りリノベーションしたが、現地の人とはもとより観光客でも賑わう成功例となった。入口に戦前の様子を残し、コースターなどに戦前風のデザインを使ってはいるが、日拠時代の説明は店内にはほんのわずかしかなかく、実際にはかつての眼科とは何の関係もない。日拠時代の記憶（再現）は一切ないと言わねばならない。店の名称も「gongyuanyanke」（中国語）であって、「miyaharaganka」ではない（但し、ホームページURLにはmiyaharaを用いている）。リノベーションはこうした民間の事例のみならず、台中市政府（台中市文化資産處）による文化資産活用事業として「台中刑務所典獄官舎及浴場修復暨再利用工程」（2016年11月～2018年2月）が進められている、といった事例も発見した。日拠時代の刑務所とその関係施設であり、負の歴史に扱われてしかるべきところであるが、現地の説明によれば「この建物の文化資産的価値を明らかにし、完成後は一般に開放して文化資産活用という目的を達成させる」といい、日本円にして約1億5000万ほどの経費をかけて工事中である。具体的な利用は不明ながら、すぐ横の刑務所演武場が先に修復されて剣道柔道やいわゆる六芸の稽古場として市民に活用されていることからすれば、「負の歴史」の記念館ではなく市民向けの憩いの施設になるものかと推される。基隆では、築港殉難者記念碑について紹介しておく。これはその名の通り基隆港の造成の際になくなった人を記念するための碑であるが、港の中央部（台湾鉄道基隆駅）から北側のかかなり高い部分に建てられている。実は碑そのものは修復中で文字もなく、展示パネルに説明が若干あるに過ぎない。1930年の建立で、かつては殉職した日本人の骨が収められていたが、引き揚げ時に骨灰は日本に持ち帰られたという。具体的な名前や人数の情報は一切なく、また何故このような山の中に建てられたのかも不明である（港を見下ろす位置ではあるが）。これは同じく殉難碑でも、ダム建設殉職者のための日月潭脇の記念碑が実名を明記し、さらに同じくダム建設殉職者のための烏山頭ダムの記念碑が日本人台湾人の差別なく名を並べたといった例に比べると、いかにも死者への扱いが粗末なような印象を受ける。修復に関する掲示も見られず、どこが主体でどれほど時間や費用がかかるのかも明らかではない。台北の事情は、上記の台中に類する。日拠時代の醸造所を改修した華山1914創意文化園區は、デザイナーズブランドの店を中心にカフェや映画館の並ぶ、アミューズメントの施設になっている。日拠以来の経緯はパネルで</p>	

展示してはいるものの、もはや往年の雰囲気はなく、かつそうした記憶を共有する場としては初めから作られていない。一方、政府主導の街区復元計画「老房子文化運動 錦町日式宿舍群」は数件立ち並ぶ日本家屋を復元するプランであるが、本年初めに完成する予定であったはずだが、予算などの問題で未完成であった。

日拠時代の記憶を残そうとする試みは主に政府による文化活動として行われ、その記憶と無関係にリノベーションされるプランは民間の商業活動として盛んなようである。いずれであれ、日拠時代をネガティブに扱うのではなく、台湾近代を作りあげた意義ある時代として位置づけ、遺産として積極的に活用しようとする姿勢が大変に強い。民主化以降の若い世代には一層そうした考え方が普通になりつつあるような印象を受けた。現地の実地を調べた結果、以上のような傾向を見て取ることができた。



(写真は左から順に、台中の宮原眼科、台中の刑務所の改修の掲示、台北の華山1914創意文化園區。宮原眼科は内部は完全に改修して往時の面影はない。上に写真を掲げた入り口は「台中市衛生院」の表示になっているが、これは敗戦の翌年1946年に日本の資産を没収してこの建物が台中市衛生院とされた時のものである。つまり、現在の「宮原眼科」には日拠期のままを示すものはない。台中刑務所典獄官舎のあたりには倒壊した日式建築があり、それにはまだ手は付けないようである。台北の華山1914創意文化園區は、もともと醸造所であったためレンガ造りの大きな建物がいくつも並び、雑貨を中心とする商店が入っている。子供を対象にした玩具を多数展示販売する一画はずいぶんと人が入っていた。但し、日本とも醸造業とも何の関係もない。いずれも今回の撮影)

成果の公表の状況

【著書】

【学術論文】竹内康浩「日台関係史の解釈をめぐって 3」（仮）として公表予定（掲載誌は未定）

教育現場で活用可能な分野等

社会科の中の、歴史では日本近代史の部分で、地理では国際交流についてで、取り上げることが可能な材料がある。日本人が建てた家屋は、日本のものと全く同じような造りになっていて、復元されたものも含め、台湾という風土の中でそれがどのようなものであったのか、考える材料となろう。また、基本的に植民者であった日本人や日本が残したものについて、台湾の人々はどのように感じどのように扱ってきたのか、考えることもできる。たとえば、韓国において旧日本時代のものが破壊湮滅せられたことと比較するのも、国際交流のあり方を考察するうえで一つのテーマとなり得よう。

配布又はダウンロード可能な資料

なし

問合わせ先

代表者：竹内康浩
電 話： 0154-44-3308
FAX :
mail :